



進修同窓会HPにアクセス



「土浦駅前の救護船」

船賃として5銭を徴し、駅前と市内とを結ぶ交通手段として大いに役立った。『むかしの写真土浦』より

土浦の洪水7～1941 [昭和16] 年の洪水～(霞ヶ浦その34)

1938年、未曾有の洪水に見舞われた土浦は、1941年にも濁水に襲われました。利根川で既往最高水位を超える出水となり、これが霞ヶ浦に逆流し、湖岸の低地は全面にわたり浸水しました。土浦中学でも7月23日からは臨時休校となりましたが、3年前の教訓が生かされ、土浦市(注1)内の被害は、その時よりは小さく済みました。

敬称を略し、旧字体は新字体に改めました。また、引用文中の【 】内は筆者による注記です。

台風が前線を刺激して

1941年7月の洪水は、台風8号の影響を受けた梅雨前線と台風本体とによる大雨が原因でした。

11日からの前線性の降雨は、館野高層気象台(現気象庁高層気象台)で3日間雨量194mmを記録しました。さらに、19日からは台風8号が関東地方東部を北上し、降水量300mmをもたらしました。台風は、22日朝、八丈島南西200kmの海上に達し、同日夕刻には房総半島南端に上陸、同夜中に筑波山付近を通過しました。この連続した降雨により、利根川本川が増水し、霞ヶ浦に逆流しました。そして、小貝川の破堤による洪水が新利根川を通じて霞ヶ浦に流入したこともあり、湖水位はY.P.注2+2.90mに達しました。

桜川堤防防御

梅雨前線と台風の上陸とによる大雨で、桜川も増水し、溢水、さらには決壊の虞(おそれ)が出てきました。そのため、霞ヶ浦・土浦両海軍航空隊から部隊が動員し、救援活動に入りました。中城町消防団員であった保立食堂店主保立俊一(中31回)は、『水郷つちうら回想』「今と昔 洪水と土浦」で、堤防の防御活動を次のように記しています。

「……、昭和十四年から桜川の改修工事ははじまったが、その二年後また洪水に見舞われた。昭和十六年七月、長雨が続き桜川が増水した。前年【昭和13年】の経験から十六年には早くから防御活動が適切に行なわれた。私達町の消防団は、連日雨の中を桜川の土手の防御にあたり、霞ヶ浦【海軍】航空隊の救援活動を受けながら土俵積みをし、土手の補強につとめた。特に【1940年11月に開隊した土浦海軍】航空隊の若い予科練生の活躍は大きかった。濡れた土を入れた俵は重い。雨の中、桜川の土手は土俵をかついだ消防団員航空隊の兵隊の長い行列で連日連夜の工事が続いた。土浦橋上流の十三年の時に越水された土手は土俵によりかさ上げされた。夜間は、土浦橋の上に航空隊の直径二メートルもあるサーチライト二台を設置して土手を照明し、そのあかりの中で作業が続けられた。その結果桜川の土手の決潰【けんくわい】からは守りとおすことが出来たのである。……。」

つなみ

桜川の堤防は何とか守りとおすことができたが、時を移さず、霞ヶ浦からの逆水が襲ってきました。その警戒にも当たった保立は、前掲書でその凄まじさも記しています。

「……、然し、利根川の増水による霞ヶ浦からの逆水が新川堤防を越水し、他の河川からの流入もあって町の中に氾濫し、一夜にして町は濁水の下になったのである。七月二十一日、私達消防団は土浦橋附近の防御が一応終わったので、危険になった桜川下流の警戒にうつった。藤川農場【現在の港町】附近の土俵積みをしていった。午後五時頃、霞ヶ浦がふくれ上った。本当にふくれ上ったと思えるよう、水量が急に増えた。土手を越えて水は藤川農場の一段と低くなっていた田圃に流れ込んだ。町に水が流れ込んだのは次の日である。自然の猛威のすさまじさ恐ろしさをしみじみ教えられた日である。」

保立が「霞ヶ浦がふくれ上った。本当にふくれ上ったと思えるよう、水量が急に増えた。土手を越えて水は……。」と言っている現象は、田宿町で菓種商を営んでいた色川美年(なほ)兄は幕末期の国学者・色川三中(なほ)が『家事記』で

「つなみ」と書いているものだと思われる。この、色川が言う「つなみ」とは、地震により発生する津波ではなく、増水した霞ヶ浦の水が辰巳(南東)の方角から吹き寄せた大風によって、土浦方面に押し寄せてくる現象を指しています。この時も、利根川からの逆流水と台風の暴風により、「つなみ」が引き起こされ、床上浸水³²⁹戸、床下浸水¹⁰¹戸に及びました。市内の湛水(たぐい、水がたまること)は2週間続き、赤痢¹⁰³人・腸チフス⁵人が発生しました。水田は1ヶ月冠水し、水稲は全滅でした。

避難

土浦市民は、床上げ(おんせ)などの対策を講じ、浸水に備えていましたが、22日夜には、高津や真鍋の高台に避難する人たちも出てきました。2年久保田寛は、その模様を1942年2月発行『進修第45号』に「水害記」として寄稿しています。

「……、丁度七月二十二日のはげしい嵐の夜だった。土浦の街は濁水の底となるかもしれないなかった床上げの最中、サイレンが夜をついて聞えた。水来るか、皆興奮してしまつた。つづいて二度のサイレンに百水の一度におしよせて総【す】べて洗ひ去るさまが目にはチラと見えるやうだった。」

家族五人は高津へ避難しようとした。床は上げてしまつたから心配はなかつたが、まだ夕飯前だった。電気はつかないローソクを頼りに無中で食べた、その間にも水は今くるか、今くるかと思ふと気が気でない。

臆【おそ】て疾風を冒して高津へ向つた、だんだん土手に近くなる魔の桜川だ、荒狂ふ激浪は、或ひは低く、或ひは高く山脈を作【な】し、うねつて土浦に溢れ来らんとしてゐる。銭亀橋を渡つたから土浦橋に置かれ

た探照燈【サーチライト】がすごいほどはつきり見えた。その光は黄に紅に紫に暗々とほてない大空を深く刺すかのやうであつた。星の有無など覚える暇もない疾風はあくまで体を川へなげこまうとつとめてゐる。傘をさしてゐたら傘と共に渦巻く水に落ちこんでしまはう。高津の街は風はひどくないから傘もさせると、それでも道路へ出るといきなり傘につき当る。森の中に這【は】入ると森はザーツと怒りたげ。樹がない所へくると何処へか飛ばされさうだ。土は軟かくなつてゐてすぐにすべる、やつとのことで某所についた服はびしょ濡れだ、奇態に蚊は一匹も居ない。

夜は颱風【台風】の襲ふ所となつた。土浦中学にも22日夜から避難民がやつて来ました。学校沿革誌には、

「7月23日(水)晴
全校臨時休校 昨夜ヨリ中学校避難所トナリ避難者約一五〇(夜二四二名)本校職員日直四名 夜直二名 校務及避難者指揮二名
午後一時ヨリ夜半ニ至ル間増水甚シク最モ危険状況ニアリ

7月24日(木)晴
県宛電報、全市冠水二十六日迄休校予定 収容避難者数二四二名
7月25日(金)曇
平常八時登校、職員分担決定、部署二就ク

と、記されていて、教職員は避難民の援助にも当たっています。

床上げ

江戸時代以来、洪水に悩まされてきた土浦の人々は、「床上げ」という方法で家財や身を守ってきました。これは、床上1m位の高さ(浸水状況によって高さを調節する。)に丸太で櫓(ぐら)足場を組み、畳や戸・障子、家財道具を上げ、

水に濡れないようにすることです。当時の家の造りは、大抵、柱がむき出しになつていて、そこに戸障子をまわして部屋をしつらえていました。障子や襖を外し、家財道具を移せば、部屋は柱だけとなります。その柱に用意の丸太を縛り付けて櫓を組みます。「床上げ」は、土浦の庶民の洪水対策の1つでした。

1年岡田満(中45回)は、『進修第45号』に、「大水の出来事」と題して、床上げをして洪水に対処した家族の様子を、次のように書いています。

昭和十六年の大水の時、毎日々々降り続いた雨の為、川は渦巻く濁流が溢れ低い土地は早くも濁流が堤を越して流れ始めた。川の近くの家々は早くも避難の用意が始められてゐた。

そ【7月22日】の夜遂に堤防決壊のサイレンは鳴つた。サイレンと同時に水はどつと押寄せて来た。「それつ」と直ちに床上げを始めたが、真暗なので、なか／＼容易でなかつたが、僕の家では男が多いので、どうやら無事に床上げは済んだ。が、しかし水深がだん／＼募つて来るので、もう一度、床上げをやりなほして、もう大丈夫といふ所まで上げた。

又、清水を井戸から汲み二階へ上げ、植木は水に浸つても大丈夫であるから、大事なもののだけを家の中へ入れてしまつた後「ほつ」と安堵【あせ】の胸をなげ【撫で】下した。これらの仕事でもう、すつかり疲れ果てたので急いで床に入つたが、水が壁にあたる音が、ひた／＼と聞えるので、又、水が殖【ふ】えたのではなからうかと、気がかりで、その夜はろく／＼眠れなかつた。不安の中に一夜は明けた。東の空が白々と白みがかつた頃、皆はもう、起き出して裏の川を見た。川岸の家々はがらんとして人影もなく、ひっそりと静まつてゐる。濁流は渦巻いて流れてゐる。彼方の霞ヶ浦を望め

ば、広々とした霞ヶ浦の水は真黒に濁つてゐる。丁度その時真黒になつた畳が五六枚重り合つて流れて来た。するとその上に白いものが動いた。何だらうと皆が首をのぼしてよく見るとそれは小犬だつた。大水の為、飼主から捨てられたのであらう。身体は真黒によごれて腹を空かしたのであらうか、かすかに飼を求め「くん／＼」となく。だがどうすることも出来なかつた。可愛さうに、小犬は川下の方へ、霞ヶ浦の方へ流れて行つた。その時、父が僕を指先でつ／＼くので指さす方を見ると、裏の家の人が屋根の上から泥水で米を洗つてゐた。水を送つてやりたいのは山々だが、流が激しい為、船などは危くて通れない。昼飯の膳に向つた時、茶碗に真白な、あた／＼かい御飯が盛られてゐるのを見た時、目に熱い涙がこみ上げて来た。この時程、如何に水の存在が人間にとつて大事であるかといふことを、しみ／＼感じたことはない。



「大和町通り」常陽銀行駅前支店付近。急造のはしごで2階から出入りしている。『むかしの写真土浦』より

土浦は広く低平な地形なので、水が一気に押し寄せることはなく、桜川沿いにあつたであろう岡田の家でも、床上げの時間が取れました。現在では床下浸水で

も大変な騒ぎですが、洪水常襲地に住む土浦市民には、家財が水に浸からなければ、家の中に水が入ることくらいは、大したことではなかつたのです。また、23日昼には温かい御飯が出されてゐることから、岡田家では燃料の炭と七輪などの調理器具もきちんと用意していたようです。水、食糧、燃料の確保の大切さは、現代でも同じです。

土浦の町中は、1938年の洪水の時と同様に、しばらくの間は濁水の下となり、土浦駅前からは市と海軍の渡船(救護船)が出ていました。しかし、保立が前掲書で「……、ただ前年の経験があつたので被害は前より少なくてすんだ。濡れた畳なども出なかつた。」と記しているように、3年前の、苦い経験を踏まえた市民の洪水対策は、功を奏しました。また、排水作業も順調に進み、土浦中学では、7月28日には84%の生徒が登校しており、2週間後には避難民も全て退去し、8月16日には大消毒を実施しています(1938年には1ヶ月余、避難民が滞在していた)。

土浦市

1940「昭和15」年11月3日に、土浦町と真鍋町とが合併し、市制を施行して土浦市が発足した。

② Y.P. (Yedogawa Peil Gage)

湖水の水位を測る量水標のゼロ点の基準には、通常、T.P. (Tokyo Peil)・東京湾中等潮位。地表面の標高を表す場合の基準となる東京湾の海面の高さが用いられる。しかし、特別に特殊基準面 (Local Datum) が用いられることがあり、利根川水系では、江戸川堀江の量水標のゼロを基準とする T.P. (江戸川工事基準面) が用いられている。量水標とは、それ自体で洪水の流水による圧力に耐えることができる柱状の構造体に、量水板(目盛)を取り付け、河川の水位を目視で読み取る設備である。洪水や増水の際に報告される水位は、この量水標の読取値である。(高21回 松井泰寿)